

## 徳富蘆花『自然と人生』

——美文としての漢文訓読調——

鈴木 義 昭

## はじめに

徳富蘆花『自然と人生』は、明治三十三年（1900年）8月18日、民友社から出版される。ジャンルとしては、小説「灰燼」、評論「風景畫家：コロオ」、<sup>①</sup>「寫生帖」所収の諸編を除き、殆どが自然の風景を描写したものである。また、小説「灰燼」、<sup>②</sup>「自然に對する五分時」中の「利根の秋曉」、「上州の山」、「空山流水」、「寫生帖」中の「雨後の月」、「湘南雜筆」中の「鰻釣り」、「海と合戦」が「ダ・テアル体」（言文一致体）であるのを除いて、いずれも「古文」（擬古文）で書かれている<sup>③</sup>。すなわち、自然の風景を描写したものの大部分が古文で書かれている。本稿で扱うものは全てこの種の古文調の文ということになる。こうした古文調の諸作に対して、徳田秋声は、「書き方が少し、今から見れば漢文句調の目触りなやうでもあるが、再応考へ直して見て、矢張漢文句調なるが故に、キチッキチッと簡潔に思想が引き締まってる、道德觀とピッタリ合ってる」と述べる<sup>④</sup>。荒正人は、「それは漢文的文語文に独特の調子をもっていたので、当時の人びとに、視覚的に親しまれたばかりではなく、音楽的快感を与えたことと思う」<sup>⑤</sup>と述べる。「漢文句調」、「漢文的文語文」という言い方には、「漢文訓読文＝漢文直訳体」と「漢文訓読調」（＝「普通文」）という含義があるわけで、それらは元来、厳密に分けられなくてはならないものである。「簡潔に引き締まっている」とはどういうことかにも触れてみなくてはならないであろう。そこで本稿では、蘆花『自然と人生』の文体にはどんな特色があるのか、改めて吟味してみることとしたい。

## (1)

ところで、「漢文訓読文」と「和文体」の文との大きな違いはどこにあるのか、まずそれに触れておきたい。すでに山田孝雄が「漢語と国語とは語の性質を異にし、語格を異にすれば、彼の語に存して我に存せぬ語法あり。彼になくして我に存し、それを加えずば国語としては意をなすこと能はざる語法あり」と指摘するように<sup>⑥</sup>、大きくは古典中国語と古典日本語との言語の系統の差異と、そこから必然的に生ずる両国語の文法的差異の中に見出されるであろう。漢文訓読文自体が古典中国語の語順を、なるべく原典に忠実に日本語の語順に変換して読むことにより成立したものであるから、差異があることは当然であるが、文法的差異という面では、とりわけ時制

表現と敬語表現の有無がカギとなるように思われる。また、和語に対する漢文訓読文体独特の語彙、そして一文の長短の差異も無視できないものとなるであろう。

古典中国語にもむろん、「已」や「将」、「未」などのように時制を表す表現はあるが、必要不可欠ではない。しかも、中国の古典語と現代語との間でもこの差異はあり、前者は時制を文脈に頼ることが多い。その一例として、現代中国語では、古典語には用いられることの少ないアスペクトを表す「了」、「着」等が用いられている<sup>(4)</sup>ことを挙げることができよう。

この間の事情は、日本人が中国古典語で書いた文章に対する後代の訓読にも同様の現象が見受けられる。例えば、『古事記』の太安万侶の「序」には、「……二靈爲群品之祖」とあって<sup>(5)</sup>、やはり時制を表示しない。それに対して、後代の訓読文では、「……二靈群品の祖となりき」のように、過去の助動詞「き」を用いている。

また、中国古典語に敬意表現がないわけではないが、むろんのことながら、日本語に存在するような独特の助動詞による敬意表現はなくて、それは語彙によって行われることが多い<sup>(6)</sup>。また、同じく、『古事記』「序」では、「是以、番仁岐命、初降于高千穂嶺、神倭天皇、經歷于秋津嶋」を「ここをもちて、番仁岐命、初めて高千穂嶺に降り、神倭天皇、秋津嶋に經歷したまひき」のように<sup>(7)</sup>、補助動詞（尊敬）の「たまふ」、助動詞（過去）の「き」を付け加えて訓読する。また、『日本書紀』「神代上」では、「既而伊弉諾尊・伊弉冉尊、共議曰、吾已生大八洲國及山川草木。何不生天下之主者歟。於是、共生日神。」を「既にして伊弉諾尊・伊弉冉尊、共に議りて曰はく、『吾已に大八洲國及び山川草木を生めり。何ぞ天下の主者を生まざらむ』とのたまふ」とあって<sup>(8)</sup>、助動詞（意志）「む」、動詞（尊敬）「のたまふ」を加えて訓読している。

要するに、古典中国語及びそれに倣って書かれた文では、文自体（主に動詞・名詞）に敬意を表す意味が内包されていることが多く、日本語のようにことさらに動詞／補助動詞「たまふ」などを用いなくても敬意の表現が行われるのである。こうした傾向は現代中国語にも見られる<sup>(9)</sup>。

一方、センテンスの長短は必ずしも両国語の決定的な違いとはならない。それは多くの場合、散文と韻文の違い、書き手と書く内容とによるものであろう。しかし、漢文訓読文の場合、先に引いた徳田秋声が「漢文句調なるが故に、キチッキチッと簡潔に思想が引締まってゐて、……」と述べるように、簡潔な表現＝センテンスの短さという言われ方がなされる。これについては次項以降、事例に即しながら眺めていくことにしたい。

## (2)

さて、徳富蘆花『自然と人生』の中に所謂「漢文訓読文」はどのようなところに現れているであろうか。手初めにまず、時制と敬意を表す表現を持った文を助動詞、補助動詞を手掛かりにして探してみたい。各文の後ろの〔 〕内には総字数、( )内には漢字数とを記入しておく。

例えば、「此頃の富士の曙」(全文)では、

- ① 心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。[18(8)]
- ② 眼前には水蒸気渦巻く相模灘を見む。[16(11)]
- ③ 若し其北端に同じ藍色の富士を見ずば、諸君恐らくは足柄、箱根、伊豆の連山の其藍色、一色一抹の中に潜むを知らざる可し。[17(10)/19 (8(5)/2(2)/9(7)) /16(8)]
- ④ 海も山も眠れるなり。[9(3)]

等総字数655字（句読点を除く）、総センテンス数33、最大字数を持つセンテンスは、50字のもので、最小は4字。1センテンス当たり平均19.8字で、助動詞の数は33を数えるが、補助動詞は用いられない。このうち、助動詞を用いないセンテンス数は10。《助動詞：「ん」（婉曲）2例、「たし」（願望）2例、「べし」（推量）2例、「なり」（推量）4例。「む」（推量）8例、「ん」（推量）1例、「ぬ」（完了）4例、「たり」（完了）1例、「り」（完了・継続）1例、「き」（過去）2例である（「ず」（打ち消し）は4例）。古典中国語の否定副詞「不」と古典日本語の「ず」とは意味的対応関係にあるので、対象外にするとしても、婉曲と願望とを除けば、全てがテンスに係わっている。自然を読むという、人間と人間との関係を含まない文章という性質から、敬意を表す助動詞、補助動詞が1例も用いられていないことが知れる。

また、「大海の出日」（全文）では、

- ⑤ 枕を撼かす涛声に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。[13(6)/8(3)]
- ⑥ 午前四時過ぎにもやあらむ、海上猶ほの聞く、波の音のみ高し。[12(5)/7(4)/7(3)]
- ⑦ 光さやかにして、宛ながら東瀛を鎮するに似たり。[7(1)/14(5)]
- ⑧ 岬端の燈臺には、廻轉燈ありて、陸より海にかけて連りに白光の環を畫きぬ。[7(4)/6(3)/19(7)]

等とあり、総字数750字（句読点・記号を除く）、総センテンス数17、最大字数を持つセンテンスは、87文字のもので、1センテンス当たり44.1字。《助動詞：24例。うち助動詞を用いないセンテンスは3例。助動詞としては、「る」（受け身）1例、「なり」（断定）2例、「べし」（可能）1例、「ぬ」（完了）8例、「つ」（完了）1例、「たり」（継続）、「たり」（完了）1例、「き」（過去）1例、「む」（推量）1例、「ん」（推量）1例、「なり」（推量）1例がある（「ごとし」3例は、古典中国語の「如」と意味的対応関係にあるので、対象外とする）。ここでは、受け身、断定、可能、打ち消しが計4例（「ず」（打ち消し）は2例）であるほかは、15例がテンスに係わっているが、やはり敬意を表す助動詞、補助動詞は用いられていない。

もう一例を「相模灘の落日」（全文）に取ってみよう。

- ⑨ 秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世に斯る平和のまた多かる可しと思はれず。[7(5)/9(5)/16(7)/20(7)]
- ⑩ 初め日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山、煙の如く薄し。[9(4)/10(7)/6(3)]
- ⑪ 日は所謂白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細ふせるにや。[6(5)/11(5)/10(3)]

⑫ 日更に傾くや、富士を初め相豆の山次第に紫になるなり。[6(3)/18(9)]

等とあり、総字数708字、総センテンス数は24、最大の語数を持つものは、96文字のもので、最小は5文字、1センテンス当たり平均29.5字。《助動詞：26例で、「たり」（断定）1例、「なり」（断定）2例、「む」（婉曲）2例、「べし」（推量）1例、「たり」（継続）3例、「り」（継続）1例、「たり」（完了）1例、「ぬ」（完了）2例がある（「ず」（打ち消し）は8例、「ごとし」（比況）は3例）。テンスに係わる助動詞は8例ということになり、依然として過半数を占めており、敬意表現の助動詞、補助動詞は見られない。佐藤勝は、自然描写の文体から「時間を除き去ってしまえば、恐らく対象は消え、文体も消える。このような時間において対象をとらえる文体の特徴がもっとも高度にかつ有効に駆使されたもの、それが『自然と人生』である」と位置づけるが<sup>(10)</sup>、そうしたテンスに関わるものを除いてしまえば、誰もが経験できる風景描写となることは事実である。

同じく自然の景物を描いたものとしてよく知られる志賀重昂『日本風景論』の「二 日本には気候、海流の多変多様な事」の冒頭の部分を眺めてみよう。この文は、岩波文庫の解説に小島烏水が書いている<sup>(11)</sup>ように、「科学と文学を調和する企て」であって、純然たる教科書風の記述と文学とがミックスされたものであることを理解しておく必要がある。因に、蘆花は「地人の関係を科学的に論ずるにあらず」としているのもあって、自ずからその目的は異なっているのであるが、普遍性を持つという意味で類似性を持つことになる。すなわち、

⑬ 日本、細長き島国、蜿蜒として北より南に延び、その間互ること実に三十度たり、北の方北極圏を距るる纔に十度半、南の方熱帯圏に入る一度半強、気候宛として半寒帯、温帯、熱帯を包羅せり。[2(2)/5(4)/12(5)/14(6)/15(10)/13(10)/18(9(6)/2(2)/7(4))]

⑭ 海流や、太平洋沿岸の南半は赤道海流（黒潮）の洗ふ所となり、北半には寒帯海流（親潮）駛走し、日本海沿岸にもまた赤道海流の一派（対馬海流）注ぎ来り、熱帯海流（リマン海流の余派）その間に錯流し、日本実に寒熱二海流の会所に当たる。[3(2)/22(15)/13(10)/24(17)/19(11)/16(11)]

等とあり、総字数510字、総センテンス数は5、1センテンス平均102字。《助動詞：総数は5。「たり」（断定）2例、「たり」（継続）1例、「り」（継続）1例（「ごとし」（比況）は1例）。むろん、補助動詞は見られず、⑭には助動詞も見られない。

同じく、『日本風景論』の「七 日本風景の保護」の冒頭部分では、

⑮ この江山の洵美なる、生植の多種なる、これ日本人の審美心を過去、現在、未来に涵養する原力たり。[9(4)/7(4)/24(12(8)/2(2)/11(6))]

⑯ 名所図絵類に至りてもまた然り、想ふ名所図絵なるもの過去において人々に旅行を奨誘し、山水の間に優游するの好風尚を勾引したる感化や著大、而して今日に当たるも憑擬するに足るもの多し、これ固より棄つべからずや。[14(7)/25(13)/24(14)/21(8)/12(2)]

等とあり、総字数529字、総センテンス数は6、1センテンス平均88.1字。《助動詞：総数は15例。「たり」(断定) 1例、「なり\*」(断定) 2例、「らる」(受け身) 1例、「ん」(推量) 4例、「き」(過去) 1例、「ぬ」(完了) 1例、「たり」(完了) 2例(「しむ」、「べし」、「ず」は数えない)》。尊敬体の見られないことは(23)～(25)と同じである。しかし、1センテンスあたりの字数は多い。

所謂「議論文」と言われるものはどうであろうか。中江兆民「君民共治の説」の冒頭の一段落を眺めてみよう<sup>(12)</sup>。

⑰ 政体の名称数種あり。曰く立憲、曰く専制、曰く立君、曰く共和なり [9(6)/4(3)/4(3)/4(3)/6(3)]。その事実についてこれを校するとき、立憲にして専制なるなり、共和にして立君なるあり [17(3)/11(4)/11(4)]。共和いまだ必ずしも民政ならずして立君もいまだ必ずしも民政ならざらばあらず [36(10)]。今や海内の士皆政治の学に熱心し政体の是非得失を講ぜざる者なし [30(18)]。しかるに東洋の風習常に耳を憑みてかつて脳を役せず、形態を模擬してかつて精神を問はず [24(9)/16(7)]。是において耳食の徒々名に眩して実を究めず、共和の字面に恍惚意を鋭して必ず昔年仏国のなせし所をなして、以て本邦の政体を改正するあらんと欲する者またその人なしとなさず [21(10)/28(14)/31(10)]。その迷謬固より不学寡聞の致す所にしていまだ深く咎むるに足らずといへども、今にしてその惑を弁ぜずんばただに莠苗自由の淆乱大に我儕自由の暢路を妨碍するのみならず、また恐くは蠱毒侵蝕暗に国家元首の幾分をしょう賊するあらん [35(12)/42(18)/26(14)]。

とある。総字数は353字、総センテンス数は8、1センテンス平均44.1字。《助動詞総数は6例。「なり」(断定) 4例、「き」(過去) 1例、「ん」(推量) 1例である(「にして」3例、「ず」10例は数えない)》。「議論文」は一般に息の長いセンテンスにより書かれている。総センテンスに比して、助動詞の数は少なく、敬意を表す表現は全く見られない。後に、こうした文において敬意を表す対象を皇室一般に止めるという決まりができたのも恐らくは、漢文訓読調の特質と無縁ではない<sup>(13)</sup>。

次に、和文脈の文章の典型と言われる樋口一葉『たけくらべ』の冒頭では、

- ⑱ 廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申し、……。 [16(7)/23(10)/27(7)/13(6)/17(6)]
- ⑲ ……正月、門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れはまことの商買人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば当てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等万倍の利益をと人ごとに言ふめれど、さりとて思ひのほかなるもの、此のあたりに大長者のうわさも聞かざりき、……。 [2(2)/13(2)/33(13)/16(6)/8(7)/38(15)/13(1)/19(5)]

等とあり<sup>(14)</sup>、(18)の文では、ここの範囲ですら総字数96字であり、(19)の文に至っては、総字数430字(句読点を除く)、総センテンス数は3、1センテンス当たり143.3字である。《助動詞は5例。補助動詞は2例。助動詞としては、「たり」(継続)1例、「き」(過去)2例、「めり」(推量)1例(「ごとし」(比況)は1例、「ず(ぬ)」は1例)で、補助動詞「たまふ」(尊敬)2例》。センテンスが長いことは言うまでもないが、(11)～(26)には例のなかった尊敬体がこの文では出ていることも和文脈であることの証拠の一つと考えられよう。

### (3)

次に、漢文訓読調に独特な表現の有無を中心に眺めていってみたい。白藤礼幸は、「訓読文の文体史」の中で、山田孝雄、築島裕両氏による漢文訓読特有語を表にした<sup>(15)</sup>。本稿ではこうしたものを参考にしながら、『自然と人生』の中の「自然に対する五分時」に見られる特有語を注16に例示しておく。ここでは漢文訓読語に頻出する漢字語(名詞・動詞)は初めから収録しなかったわけであるが、そうした漢字語の頻出が漢文訓読調の根幹をなしていることは言うまでもない。また、この表において、山田、築島両氏などの言う漢文訓読独特語の語法からきた表現を除外してみると、二語の漢字に「にして」の付いたものが一番多いが、「連りにも」のように、漢字一語に「りにも」のついたものや、「蓬々然」に「として」のついた漢字三語の副用語が実に豊富に用いられていることに気づく。こうした副用語が漢文訓読文を形成している一つの要因であると考えられる。少なくとも、樋口一葉の文章の中からこの種の語彙を捜すのは余り容易ではないであろう。

ところで、それぞれのセンテンスの長短を考えてみたい。漢詩を訓読する場合、五言と七言とがあるわけであるが、一句を訓読するのに日本語では大体何字ぐらい費やすのであろうか。服部南郭によれば(注17に示す)、漢字をそのまま読んだ5文字は別として、概ね6文字から13文字の間で訓読し、詩中の漢字は全部読むようにしている。漢字数が5字にならないものは、ここでは否定の「不」等を漢字化していないところから来る。これは七言詩でも同様である。漢字を含めて8文字から15文字の間で訓]む。五言、七言の漢詩の訓読は、一応最大限15文字、最小限5文字あたりにあるのが一般的と言える。その中に含まれる漢字数は、4文字から6、7文字くらいが標準的のようである。散文については江戸中期以来、日本人によく読まれた『古文真寶』「後集」に収められる散文の中から何編かを選んでその字数を見てみたい。注20に挙げたように、陶淵明「歸去來辭」では、「歸りて去らめ」(「歸去來兮」)を有名な訓読「歸りなんいざ」(或いは、「かへんなんいざ」とすれば、総字数に対する漢字数が減り、訓読特有語としての意識が強まる。「已に往んしことの諫めざらましきことを悟り」(「已往悟不諫」)の箇所では、過去の助動詞「き」、打ち消しの助動詞「ず」、推量の助動詞「まし」が入り、動詞等を名詞化する働き(主語や目的語扱いにする)を持つ形式名詞「こと」が二度使われることにより、訓読文は非常に長

くなっている。「已往の諫めざるを悟り」([10-4・5])のように訓読することもでき、このようにすれば、総字数と漢字数の比率が上がり、より訓読語らしくなる。この文では、前出「～こと」の頻出の外、「～が如し」のような訓読特有語が文を長くしている。また、歐陽修「醉翁亭記」では、「～ずして」のような訓読特有語が原典の漢字数をはるかに上回る語数を漢文訓読文に与えている。後出の副用語独特の連用形表現「～～として」も同様である。しかし、それこそが漢文訓読文を漢文訓読文たらしめていると言ってよいであろう。この文では、「北の方」、「南の方」のように、方位詞の後ろに着く「かた＝方」も訓読特有語とすることができる。元来は、動詞「南する」と方位詞「南にある」などを区別するため（ここでは後者）に訓まれたものであろうが、このため総字数に対する漢字数の比率が小さくなる。「～の若し」は「～が如し」と同じ。柳宗元「捕蛇者説」では、接続語の「然」の存在を挙げることができる。この語は順接にも、逆接にも解釈でき、この文では逆接として用いられているため、訓読語の語数を増やしている。また、王安石「讀孟嘗君傳」における接続語の「而して」、「然ずんば」、接続表現の「～にしたれば」などが訓読語の語数を増やしているわけである。

#### (4)

次に、蘆花『自然と人生』とほぼ同時期に書かれた泉鏡花の「龍潭譚」所収の「躑躅が丘」の冒頭の一部を見てみたい<sup>(21)</sup>。

- ㊹ 日は午なり [5(2)]。あらら木のたたら坂に樹の蔭もなし [17(4)]。寺の門 [3(2)]、植木屋の庭 [5(4)]、花屋の店など [6(2)]、坂下を差し挟みて町の入り口にはあたれど [19(7)]、のぼるに従ひて [7(1)]、ただ畑ばかりとなれり [10(1)]。番小屋めきたるもの小だかき処に見ゆ [17字(6)]。谷には菜の花残りたり [10(4)]。路の右左 [4(3)]、躑躅の花の紅なるが [9(4)]、見渡す方 [4(3)]、見返る方 [4(3)]、いまを盛りなりき [8(1)]。ありくにつれて汗少しいでぬ [13(2)]。

とあり、この部分は総字数142字（句読点を除く）、センテンス数は7、1センテンス平均20.2字。最大のセンテンスは47字のもので、最小は5文字。《助動詞：5例。「なり」（断定）1例、「り」（完了）1例、「たり」（継続）1例、「ぬ」（完了）1例、「き」（過去）1例で、補助動詞、助動詞の尊敬体はない》。センテンスも比較的短いが、だからといってこの文章を漢文訓読調と感じはしないであろう。「ばかり」、「～めく」、「見ゆ」、「～の～が」、「方」、「ありく」等の和語が使われているからであるし、それぞれの区切りに用いられている漢字の割合が多くないからでもある。同じく、

- ㊺ 一人にては行くことなかれと [13(3)]、優しき姉上のいひたりしを [12(3)]、肯かで [3(1)]、しのびて来つ [6(1)]。おもしろきながめかな [10(0)]。山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢おり来れり [23(8)]。眉太く [3(2)]、目の細きが [5(2)]、向ざまに顛

巻したる [9(3)], 額のあたり汗になりて [10(2)], のしのしと近づきつつ [10(1)], 細き道をかたよけてわれを通せしが [16(3)], ふりかへり [5(0)], (省略) といひすてに眦に皺寄せてさつさつと行過ぎぬ [21(5)].

とあり, この部分の総字数は146字, センテンス数は4, 最大のセンテンスは80字, 最小のものは10字, 1センテンス平均36.5字。《助動詞: 8例。「たり」(完了) 1例, 「たり」(継続) 2例, 「つ」(完了) 1例, 「り」(完了) 1例, 「ぬ」(完了) 1例》, ここにも補助動詞, 助動詞の尊敬体は用いられていない。文の長さも漢文訓読調と和文体との中間的な値を持っている。「〜で」, 「向さま」, 「のしのし」等が和語として用いられている。しかし, 漢文訓読調の語も「〜なかれ」, 「来る」が用いられており, 純然たる和文脈でもなく, 純然たる漢文訓読文でもないことを物語っている。敢えてカテゴリー化するならば, 「和漢混淆文」と言うことができよう。

蘆花『自然と人生』においてはどうかであろうか。まず, 比較的短い文章を見ることにしたい。「檐溜」の冒頭の一部は,

㊹ 雨後 [2(2)], 庭櫻落ちて雪の如し [9(5)]. 檐溜にも點々として浮べり [12(5)].

檐溜を浅しと云ふことなかれ [13(4)].

其の碧空を懷に抱けるを見ずや [14(6)].

檐溜を小なりと云ふことなかれ [14(4)]. 青空を映り, 落花も點々として浮び, 桜の梢も倒まに覗き, 底なる土の色をも見めす [5(3)/10(3)/9(4)/11(4)]. 白鷄三羽來りて, 紅の冠を揺かしつゝ, 俯して銜み, 仰いて飲めば, 其影も亦水にあり [7(5)/9(3)/5(2)/6(2)/8(4)]. 融然として相容れ, 怡然として共棲す [8(4)/8(4)]. 奈何んぞ人の子の住む世界の隘き。[15(8)]

とあり, 総字数165字, 9センテンス。1センテンス当たり18.3字。「ごとし」, 「〜ことなかれ」, 「〜を見ずや」, 「奈何んぞ」などという漢文訓読文独特の表現に, 「檐溜」, 「庭桜」, 「見めす」, 「碧空」, 「落花」, 「さかしまに」, 「點々として」, 「銜む」, 「融然」, 「怡然」, 「共棲」といった漢字語を配しており, 一文の中に占める漢字の割合は泉鏡花のそれと比べると多い。これを漢詩の訓読あるいは, 散文詩と見る人がいるとすれば, 一文の中に占める漢字の割合が五割を越えることが比較的多く, 1センテンス平均18.3字と字数が少ないため, 漢詩の訓読の一般的標準に近いと感じるからではなかろうか。同様の趣向として書かれた「梅」の一部を挙げる。

㊺ 寺古りて, 梅二三本 [4(2)/4(4)]. 月あらば更に好し [8(3)].

或年の二月, 小田原より湯元に遊び, 早雲寺に詣る [5(4)/10(6)/6(4)].

時に夕陽函嶺に落ち, 一鴉空を度り, 群山蒼々として暮れむとす [9(6)/6(4)/12(5)]

寺内, 人なく, 唯梅花兩三株雪の如く黄昏に立てり [2(2)/3(1)/16(11)]. 徘徊良久

ふして空を仰げば, 古りし鐘樓の上に夕月の夢よりも淡きを見たりき [12(6)/22(9)]

総字数121字, 1センテンス平均20.2字, 助動詞の「き」がある他は, 「〜むとす」, 「良久し」な



どの表現と「梅花」,「或年」,「詣る」,「夕陽」,「函嶺」,「一鶴」,「度る」,「群山」,「蒼々」,「唯」,「兩三」,「徘徊」などの漢語が用いられており、一文の中に占める漢字の割合が高く、センテンスも平均20.2字と短いので、これもほとんど漢詩の訓読文に近い文体と言ってもよいであろう。

それでは、次に漢字の訓と音の違いによる表現における差異を眺めてみよう。例えば、「朝霜」では、冒頭の一段落を

- ㊹ 余は霜を愛す。其の凜として潔きが為めに。其の牢晴を報ずるが為めに。[6(3)/12(4)/12(5)]

のように、総字数30字に対して3センテンスとしているので、1センテンス平均は10字となる。しかも、数倒置法を用いている。また、字数と漢字数との割合(40%)から見ても、漢文訓読調の文と考えるべきであろう。次の段落では、

- ㊺ 或時十二月の末、朝早く大船戸塚のあたりを過ぎ居たり。[7(6)/17(8)] 珍しき霜朝にして、田も畑も家も真に薄雪の降りたる様に、村々の竹藪常磐木の類までも一白なりき。[8(3)/17(8)/18(10)]

のように、総字数67字で2センテンス、前者が24字であるのに対して、後者は43字。ともに漢字を用いているが、「大船戸塚」などの固有の地名であったり、「霜朝=しもあき」、「田=た」、「畑=国字」、「薄雪=うすゆき」などであったり、訓で読むべきものが大部分である。センテンスは前者が比較的短くて、漢詩訓読調であるが、漢文訓読特有語の存在はない。後者は前者同様訓読みの漢字が多く、和文脈に近いものと言ってよいであろう。そして、第三段落では、

- ㊻ 暫らくする程に、東の空金色さして、杲々たる旭日一点の翳もなき空にあらはれ、億万条の光線は一面の田野人家を射、霜は皎々晶々として表に白光を放ち、陰に紫の影を落しぬ。[7(2)/8(4)/19(8)/16(12)/16(9)/9(4)] 人家も、藪も、田の中央に積みし稲塚も、乃至寸ばかり地より起てる藁屑も、すべて日に向かひて白く日に背いて紫に、目の到る所、一望所として白光紫影ならざるはなく、紫影の中霜また隠々として見る可し。[3(2)/2(1)/11(6)/15(7)/18(6)/5(3)/17(7)/16(8)] 地はすべて紫水晶の塊となりぬ。[14(5)]

のように、総字数162字、全2センテンス。1センテンス当たり81字と長いセンテンスを用い、「ぬ」によって2センテンスを終わらせ、「する程に」を用いているという意味では、和文脈を骨子としているのであるが、中に使われている言葉には、「旭日一点の翳もなき」、「皎々晶々」、「一望所として～ならざるはなく」といった漢文訓読特有語が随所に見られる。最後の段落は、

- ㊼ 一農夫あり [5(3)], 霜野の真中に [6(4)], 藁を焼きつつあり [8(2)]. 青煙蓬々として広がり、広がるまゝに日光を遮り、遮るまゝに白金色となり、やゝ濃やかになりて終に煙も亦薄紫の色を帯びぬ [10(5)/11(4)/11(4)/22(8)]. 此より余は霜を愛することいよいよ深し [18(5)].

のように、総字数91字。3センテンス。長いセンテンスは54字のもの、短いものは8字で、長短のセンテンスを混淆させる。短いセンテンスの中に「一農夫」などの漢字の音読語系の言葉を用い、長いセンテンスの時には「濃やか」、「遮る」、「煙」、「薄紫」などの和語系の言葉を用いる。こうすることによって、音と訓との調和を取っているかのように見える。徳富蘆花『自然と人生』の中にちりばめられる短いセンテンスの文は、漢詩の訓読文と似ていると言うこともできる。むしろ、彼の短いセンテンスの文には、漢詩の訓読文の長さに近いという特色があると言う方が正確であろう。

美文家としてならした落合直文にもそういう点がある。雑誌「国文」に発表した「国文学者の事業」の冒頭の一段<sup>(22)</sup>では、

- ⑳ 国文学の盛んなること、今日より甚だしきはなからむ。[10(4)/13(3)] 去年の春のころ、去年の秋のころ、一時の流行なりといひし輩もありたれど、そは一時の暴の暴言論者、また自らその暴言なりしことは、予輩のたびたび論ぜしところ、今日にいたりては、その暴言論者、また自らその暴言なりしを知りしならむ。[7(3)/7(3)/18(5)/11(7)/14(3)/13(3)/8(2)/6(4)/18(4)]

総字数は125字、総センテンス数は2で、短いセンテンスが23字、長いセンテンスが102字である。助動詞は総数11、うち「む」（推量）2例、「なり」（断定）5例、「き」（過去）4例である。もちろん、敬意を表す助動詞、補助動詞の類もない。訓読特有語、「～なること～」、「～より甚だしきはない」が短いセンテンスの中に現れているにもかかわらず、「なからむ」のような和語系の表現をしたり、長いセンテンスの中に「流行」、「暴言論者」といった漢語系の語を多用する。それに対して、同年二月「日本學誌」に発表した「日本主義の未來」の冒頭の一段落では<sup>(23)</sup>、

- ㉑ 世人口を開けば則ち曰く日本主義と [16(10)], 世人筆を採れば則ち曰く日本主義と [16(10)], 日本主義の行はるゝ実に今日より甚だしきはなし [22(9)]. 日本国人たる者 [7(5)], 之を祝し之を喜ばずして可ならむや [16(5)].

とあり、総字数77字、2センテンス。助動詞の総数は5例。うち、「る」（受け身）1例、「たり」（断定）1例、「ず」（打ち消し）1例、「なり」（断定）1例、「む」（推量）1例である。敬意表現はない。「～ば則ち～」、「曰く」、「～する（こと）～」、「～より甚だしきはなし」、「～して可ならむや」などの漢文訓読特有語が多数見られる。短いセンテンスで歯切れよく畳み掛けるように述べられている時、我々はそれを漢文訓読調と感じるのではなかろうか。この文は漢文訓読調の文と言うことができる。落合直文はこうした二つの方法を使うことができたわけである。その点では、男女の別はそれほどなく、明治三十七年に出版された福田英子『妾の半生涯』の中では、「はしがき」だけが漢文訓読調の文で、各章では和文脈の勝った文体を用いて書いている<sup>(24)</sup>。徳富蘆花が各種の文体を駆使できたことも容易に想像できるであろう。

## おわりに

以上のことから見て、徳富蘆花は『自然と人生』において漢文訓読系の文章を、和文的要素が強いもの、漢文訓読的要素の強いもの等と、さまざまに変化させて用いることができたということになる。『自然と人生』は、言うならば、「言文一致体」あり、「擬古文」を基調としたものあり、「和漢混淆文」を基調としたものありというような、さまざまな文体の「実験ノート」的な観を呈していると言えるであろう。「和漢混淆文」にしても中国古典語によって表現されたものをそのまま読み替えた漢文訓読文ではなくて、和文脈も取り入れた所謂「普通文」であることが知られる。にもかかわらず、「漢文訓読調の美文」と称されるのは、厳密に言えば、正鵠を射た指摘とは言えないであろう。むしろ、「漢文訓読調」と「和文脈」との混淆に妙処があると考えられる。その混淆の妙こそ徳田秋声、荒正人に相応の評価を受ける所以であると思われる。

## [注]

- (1) 底本は徳富蘆花『自然と人生』（岩波文庫版 1933。および「精選名著復刻全集 近代文学館」版）による。引用は前者を用いる。以下同じ。
- (2) 集英社『日本文学全集 6 徳富蘆花』「作家と作品」(p.449)。
- (3) 山田孝雄『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』（宝文館 1935），p.20
- (4) 中国古典の現代中国語訳によれば（姜濤等編著『古文百則』遼寧人民出版社 1980による）
  - (a) 昭陽爲楚伐魏，覆軍殺將，得八城，移兵而攻齊。（『戦国策』）
  - (b) 楚國の上柱國昭陽爲楚國攻打魏國，摧毀了魏國的軍隊而又攻打齊國。
 である（aが原文，bが現代語訳）とか，
  - (a) 楚人和氏得玉璞楚山中，奉而獻之勵王。（『韓非子』）
  - (b) 楚國人卞和在楚山里得到了。一壞未經雕琢的璞玉，手捧着。（璞玉）進獻給勵王。
 とあって、動詞の後ろに「了」や「着」を用いている。
- (6) 倉野恵司校注・岩波文庫『古事記』（岩波書店 1963）による。
- (7) 現代中国語の敬意表現
- (8) ○及勵王薨，武王即位，和又奉其璞而獻之武王。（『韓非子』）の中に見られる「薨」は王以上の者の死を意味し、「奉」，「獻」が下位のものが上位のものに進上する動詞であることはよく知られている。
- (9) ○見楚王。王曰：「齊無人耶？」晏子對曰：……（『晏子春秋』）の中に見られる「見」は「まみゆ」と訓み，下位のものが上位のものに「会見する」ことであり，「對」が「こたふ」と訓み，下位のものが上位のものに「回答する」ことを言うこともよく知られている（引用は注（4）に同じ）。
- (10) 「文体に見る100人の作家」（『国文学解釈と鑑賞』一月臨時増刊・一九六九 学灯社）
- (11) 「〔岩波文庫初版〕解説」（近藤信行校訂『日本文景論』岩波文庫・1995 p.368）
- (12) 「中江兆民評論集」（松永昌三編・岩波文庫・1993 p.21）
- (13) 林巨樹『近代文章研究』－文章表現の諸相－（明治書院 1976 p.17等）
- (14) 「にごりえ・たけくらべ」（岩波文庫・一九二七初版，今は一九九三年版による）
- (15) 「訓読文の文体史」による。
- (16) ○～ずば (p.53) /恐らくは (同) /～ざるべし (同) /唯 (同) /～べし (同) /而して (同) /～んとす (同) /～ずして (同) /～むとす (同) /すでに (同) /請ふ～せよ (p.54) /忽然として (同) /～の如し

(同) [此頃の富士] ○～にして (p. 60) /猶 (同) /宛ら～似たり (同) /速りにも (同) /すでにして (同) /～が如く (同) /声なきの声 (p. 61) /～もて (同) /～すること其～ (同) [大海の出日] 所謂 (p. 62) /～ざるはなし (同) /あたかも～の如し (同) /嚇焉として (同) /恰も (同) /独り～として (同) /端然として (同) /融然として (同) /未だ～ず (同) /愈々 (同) /忽ちにして (同) /唯～のみ (同) /悠々として (p. 63) /無矣 (同) /蒼然として (同) /然も (同) /斯くの如し (同) [相模灘の落日] ○猶～べし (p. 64) /簇々として (同) /尤も可し (同) /何ぞ～むや (同) /妙なり (p. 65) [雑木林] ○點々として (p. 66) /～ことなかれ (同) /怡然として (同) /相容れ (同) /奈何んぞ (同) [檐溜] ○あらざる (p. 67) /～なきを得むや (同) /～於いて (同) /まさしく (同) /即ち (同) [春の悲哀] ○拐然として (p. 68) /纔かに (同) /やや (同) /ちよく然として (同) /姍々として (同) /共に (同) /渾べて (同) /沈々として (同) /鬱然として (p. 69) /殷々として (同) /颯と (同) /將 (同) /蕭然として (同) /濛々たる (同) /～こと云ふべくもあらず (同) /酣なれど (同) /惨として (同) /森然として (同) /頻りに (同) /颯々として (同) [自然の聲 (1) 高根の風雨] ○可盡可歌 (p. 69) /亦 (70) 俄に (同) /何處にか (同) /蕭々として (同) /是れ (同) [(二) 碓氷の川音] ○然も (p. 71) / [栗] ○～しむ (p. 73) /飄然として (同) / [風] ○渺々と (p. 74) /晃々と (同) /～す (同) /皎々と (同) /且つ～且つ～ (同) /～ずや (p. 75) [自然の色 (一) 春雨後の上州] ○寧ろ (p. 75) /～や～ (同) /見る可くして (同) /況や～をや (同) /～嘆ずるのみ (同) /襯して (同) /たまたま (同) /或いは (同) /～毎に (同) /彼方～此方 (p. 76) [(二) 八沙の花] ○のみにて (p. 76) /嚇焉 (同) /又～又～ (同) /倍々 (同) /漸く (p. 77) /幽然と (同) [(三) 相模灘の夕焼け] ○斯の如く (p. 78) /盡々く (同) /轉た (同) /尤も (同) /～し去る (p. 79) /争かで～可けんや (同) /是れ (同) /～んと欲し (同) /實に (同) /～ざる可き (p. 80) /對して (同) /次第に (同) /願くは (p. 81) /與へよ (同) [山百合 又] ○凜として (p. 82) /爲に (同) /眞に (同) /杲々たる (同) /晶々として (同) /乃至 (同) /到る所 (同) /～ならざるはなく (同) /蓬々として (同) / [朝霜] ○然も (p. 83) /却つて (同) /茫々たる (同) /呀と (同) /音に (同) /更に (p. 84) ○彌 (p. 85) /屹として (同) /黝然として (同) /轄どうとして (同) /曾て (同) /撞乎と (同) /～をして～しむ (同) [海と岩] ○流石に (p. 86) /悉く (同) /啞々と (同) /如何なるもの (同) [榛の木] ○未だ～ざる (p. 87) /牽き得て (同) /～しむ (同) [薄] ○ヒヒ (p. 88) /溶々として (同) /何ぞ (同) /斑々として (同) /得～ぬ (同) [良夜] ○蓬々然と (p. 90) /清涼なる (同) /嬉々と (同) /徐々に (同) /綿々蓬々として (同) /牢乎として (同) /已にして (同) /卒然として (p. 91) /及び (同) /能はず (同) /若くは (同) [香山三日の雲 (一) 五月十日] ○瀟々として (p. 91) /濛々として (p. 92) /條々として (同) /果然 (同) /而下 (同) /頓て (同) /夥しく (同) /雜然として (同) /到らざる所なく (同) /到底 (同) /～に遑あらず (p. 93) /～に於ける (同) /連綿し (同) /重々として (同) [同 (二) 五月十三日] ○默然と (同) /宛として (同) /颯然として (同) /隱々として (同) /浮々として (同) /終に (p. 95) [同 (三) 五月十八日] ○殊に (p. 96) /霏々として (同) [五月の雪] ○茫として (p. 97) /分明に (同) [香山の朝] ○辛ふじて (p. 98) /～の外 (同) /～する所を知らず (同) /まさきに～んとす (同) /遍く (同) /處々に (同) /狼藉として (p. 99) /～を過ぐる (こと) 五分 (同) [相模灘の水蒸気] ○故に (p. 100) /然も (同) /見る可からず (同) /何人も (同) /奈何んぞ (同) [富士の倒影] ○諸處に (p. 102) /甚だ大にして (同) /～を以て (同) /往々にして (同) /極めて (同) /何處ともなく (同) /悠々として (同) /嚇として (p. 103) /杳々として (同) /～むとするに似たり [四ッ手綱] (( )) 内はページ数。重複は採録せず。漢字語 (名詞・動詞) は敢えて挙げない)

- (17) ○爲之工，以磨其器用，爲之賈，以通其有無，爲之醫藥，以濟其天死，爲之葬埋祭祀，以長其思，爲之禮，以次先後，爲之樂，以宣其湮鬱，爲之政，以率其怠倦，爲之刑，以鋤其強梗。(韓愈「原道」。之が工を爲して以て其器用を磨し，之が賈を爲して以て其有無を通じ，之が醫藥を爲りて以て其天死を濟ひ，之が葬埋祭祀を爲して以て其思愛を長じ，之が禮を爲りて以て其先後を次し，之が樂を爲りて以て其湮鬱を宣べ，之が政を爲して以て其怠倦をして率ゐ，之が刑を爲りて以て其強梗を鋤す。)

○使負棟之柱，多於南畝之農夫，架梁之楹，多於機上之工女，釘頭，多於在之粟粒，瓦縫參差，多於周身之帛縷，直欄橫檻，多於九土之城郭，管弦嘔啞，多於市人之言語。(杜牧「阿房宮賦」。棟を負ふ柱をして，南畝の農夫より多く，梁に架くるをして，機上の工女より多く，瓦縫の参差たるをして，周身の帛縷より多く，直欄横檻をして，九土の城郭より多く，管弦の嘔啞たるをして，市人の言語より多からしむ。

○……人不知而不愠，不亦君子乎。(『論語』「学而第一」……人知らずして愠まず。亦君子ならずや。)

- (18) [ ] 内の数字は，前が訓読文の語数，後ろが漢字数である(以下，注12～15も同じ)。

○中原還た鹿を逐ふ [8-5] / 筆を投じて戎軒を事とす [11-5] / 縦横計就らず [6-5] / 慷慨志し猶存す [7-5] / 策を杖いて天子に謁し [10-5] / 馬を驅せて關門を出づ [10-5] / 纓請ふて南粵を繋ぎ [10-5] / 舳に憑つて東藩を下す [10-5] / 鬱紆として高岫に陟り [10-5] / 出沒して平原を望む [9-5] / 古木寒鳥鳴き [6-5] / 空山猿猱啼く [6-5] / 既に千里の目を傷しめ [10-5] / 還つて九折の魂を驚かす [11-5] / 豈艱險を憚らざらんや [10-4] / 深く國土の恩を懷ふて [10-5] / 季布二諾無く [6-5] / 侯嬴一言を重んず [8-5] / 人生意氣に感ず [7-5] / 功名誰か復た論ぜん [9-5] (『唐詩選』「五言古詩」，魏徵「述懷」) ○長安一片の月 [6-5] / 萬戸衣を搗つ聲 [7-5] / 秋風吹き盡くさず [8-4] / 總べて是れ玉關の情 [9-5] / 何れの日か胡虜を平らげて [12-5] / 良人遠征を罷めん [8-5] (李白五言古詩「子夜吳歌」) ○細艸微風の岸 [6-5] / 危檣独夜の舟 [6-5] / 星は平野に随つて濶く [10-5] / 月は大江に湧いて流る [10-5] / 名は豈に文章をもつて著はし [13-5] / 官は老病に因つて休む [10-5] / 飄飄として何の似たる所ぞ [12-5] / 天地一沙鷗 [5-5] (杜甫五言律詩「旅夜書懷」) ○怪しみ來る壯闊閉することを [13-5] / 朝より下りて相迎へず [10-5] / 總べて春園の裡に向つて [11-5] / 花間笑語の聲 [6-5] (王維五言絶句「班婕妤」)

- (19) ○滕王の高閣江渚に臨めり [11-7] / 佩玉鳴驚歌舞を罷む [9-7] / 盡棟朝たに飛ぶ南浦の雲 [11-7] / 朱簾暮れに捲く西山の雨 [11-7] / 間雲潭影日びに悠悠 [9-7] / 物換はり星移りて幾度の秋ぞ [13-7] / 閣中の帝子今何くにか在る [12-7] / 檻外長江空しく自づから流る [13-7] (王勃七言古詩「滕王閣」) ○盧家の少婦鬱金堂 [8-7] / 海燕雙棲す玳瑁の梁 [9-7] / 九月寒砧木葉を催す [9-7] / 十年征戍遼陽を憶ふ [9-7] / 白狼河北音書斯へ [8-7] / 丹鳳城南秋の夜長し [10-7] / 誰れか爲に愁へを含む獨不見 [13-7] / 更に名月をして流黄を照らさ教む (〔15-7〕沈\*期七言律詩「古意」) ○昔人已に白雲に乗じて去る [12-7] / 此の地空しく餘す黃鶴樓 [11-7] / 黃鶴一たび去て復た返らず [12-6] / 白雲千載空しく悠悠 [9-7] / 晴川歴歷たり漢陽の樹 [10-7] / 芳草萋萋たり鸚鵡洲 [9-7] / 日暮鄉關何れの處か是なる [12-7] / 烟波江上人をして愁へ使む [12-7] (崔\*七言律詩「黃鶴樓」) ○君帰期を問ふ未だ期有らず [12-7] / 巴山の夜雨秋池に漲る [10-7] / 何ぞ當に共に西窗の燭を翫て [13-7] / 却て巴山夜雨の時を語るべき [13-7] (李商隱七言絶句「夜雨寄北」)

- (20) ○歸り去らめや [6-2・4] / 田園將に蕪なるとす [9-4・4] / 胡そ婦らざる [6-2・3] / 既に自心を以て形の役と爲す [13-7・7] / 奚ぞ惆悵して獨り悲しめる [12-5・6] / 已に往んしことの諫めざらましきことを悟り [20-4・6] / 來る者の追ふ可きことを知る [13-5・6] / 實に塗に迷ふこと其れ未だ遠からず [16-6・6] / 今は是にして昨は非なることを覺んぬ [17-5・6] / 舟搖々として輕く颺り [10-5・6] / 風飄飄として衣を吹く [10-5・6] / 征夫に問ふに前路を以てす [12-6・6] / 晨光の熾微なるを恨む [10-6・6] (『歸去來辭』。[]) 内の前の数字は訓読文の語数，中の数字は訓読文の中の漢字数，後ろの数字は原典の中の数である)。○壬戌の秋 [4-3・4] / 七月既望に [5-4・4] / 蘇子客と舟を泛べて [9-6・6] / 赤壁の下に遊ぶ [8-4・6] / 清風徐に來りて [7-4・4] / 水波興らず [5-3・4] / 酒を舉げて客に屬す [9-4・4] / 明月の詩を誦し [7-4・5] / 窈窕の章を歌ふ [7-4・5] / 少焉つて月東山の上より出でて [14-7・9] / 斗牛の間に徘徊す [8-5・7] / 白露江に横はり [7-4・4] / 水光天に接はる [7-4・4] / 一葦の如く所を縦にして [11-5・6] / 万頃の茫然たるを凌ぐ [10-5・6] / 皓皓乎として虚に憑り風に御つて [15-7・8] / 其の止まる所を知らざるが如く [14-5・6] / 飄飄乎として世を遺れて獨り立ち [15-7・8] / 羽化して仙に登るが如し [11-5・5] / 是に於て酒を飲んで楽しむこと甚し [15-6・6] / 舷を叩て之を歌ふ [8-4・5] / 歌て曰く [4-2・2] / 桂の權，蘭の獎 [6-4・4] / 空明に曄いて流光に浜る [11-6・7] / 渺渺として予れ懷び [9-4・5] / 美人を天の一方に望む [10-6・7] (蘇東坡「赤壁賦」) ○滁を還て皆山なり [8-5・5] / 其西南の諸峯 [6-5・5] / 林壑尤も美なり [7-4・4] /

之を望めば蔚然として深く秀る者は琅琊なり [20・9・11] /山行六七里にして [8・5・5] /漸く水聲を聞く [7・4・4] /潺潺として兩峯の間に瀉き出る者は [16・8・11] /醴泉なり [4・2・3] /峯回路轉めぐつて亭有り [12・6・6] /翼然として泉上に臨める者は [13・7・7] /醉翁亭なり [5・3・4] /亭を作る者は誰ぞ [8・4・4] /山の僧智遷なり [7・6・6] /之を名くる者は誰ぞ [9・4・4] /太守は自謂ふなり [8・4・5] /太守客と來て此に飲む [10・6・8] /飲むこと少くして輒ち醉ふ [12・4・4] /年又最も高し [6・4・5] /故に自號して醉翁と曰ふなり [13・6・7] /醉翁の意は [5・3・4] /酒に在らずして [7・2・3] /山水の間に在り [7・4・7] /山水の樂 [4・3・4] /之を心に得て [6・3・3] /之を酒に寓す [6・3・5] (歐陽脩「醉翁亭記」) ○予夫の巴陵の勝状を觀るに [12・7・7] /洞庭の一湖に在り [8・5・5] /遠山を銜み [5・3・3] /長江を呑み [5・3・3] /浩浩湯湯として [7・4・4] /横に際崖無し [6・4・4] /朝暉夕陰 [4・4・4] 子/氣象萬千なり [6・4・4] /此れ則ち岳陽樓の大觀なり [12・7・9] /前人の述備れり [7・4・6] /然れば則ち北の方巫峽に通じ [13・7・6] /南の方瀟湘を極めて [9・5・4] /遷客騷人 [4・4・4] /多く此に會まる [7・3・4] /物を覽るの情 [6・3・4] /異ること無きことを得ん [11・3・4] (范仲淹「岳陽樓記」) 17, ○浩浩乎として平沙埭り無く [12・7・7] /復かして人を見ず [8・3・4] /河水縈り帶び [6・4・4] /群山糾紛す [5・4・4] /黯として慘悴し [7・3・4] /風悲し日曠ぬ [7・4・4] /蓬斷へ草枯て [6・4・4] /凜として霜の晨の若し [10・4・4] /鳥飛で下らず [6・3・4] /獸挺つて羣を亡ふ [8・4・4] /亭長余に告て曰く [8・5・5] /此れ古の戰場なり [8・4・5] /常て三軍を覆す [7・4・4] /往往に鬼哭す [6・4・4] /天陰れば則ち聞ふ [8・4・4] /心を傷ましめるかな [9・2・3] /秦か漢か [4・4・4] /將た近代か [5・4・4] (李華「弔古戰場文」) ○永州の野に、異蛇を産す [10・6・7] /黒質にして白章あり [9・4・5] /草木に觸るれば盡く死し [11・5・5] /以て人を嚙めば之を禦ぐ者無し [14・7・7] /然れども之を得てし以て餌と爲せば [17・7・8] /大風擥癭癭を已し、死肌を去り、三蟲を殺す可し [21・14・10] /其始め太醫王命を以て之を聚め [14・9・9] /歳々其二を賦す [7・5・4] /募りて能く之を捕ふる者あれば [14・5・6] /其租に當つ [5・3・4] /永の人争うて奔走す [9・5・7] (柳宗元「捕蛇者説」) ○世皆稱す [4・3・3] /孟嘗君能く士を得もたり [10・6・6] /士故を以て之に歸し [8・5・5] /而して卒に其力に頼りて [11・5・5] /以て虎豹の秦を脱せりと [11・5・7] /嗚乎 [2・2・2] /孟嘗君は特に鶏鳴狗盜の雄のみ [14・9・11] /豈に以て士を得たりと言ふに足らんや [17・6・6] /然らずんば [5・1・2] /齊の強を擅にしたれば [10・3・4] /一士を得るも [6・3・4] /宜しく以て南面して秦を制す可かるべし [18・7・8] /尚何ぞ鶏鳴狗盜の力を取らんや [14・8・10] /夫れ鶏鳴狗盜の其門に出づるは [14・8・9] /此れもの士の至らざる所以なり [12・5・8] (王安石「孟嘗君」)

(21) 『鏡花短篇集』(川村二郎編、岩波文庫 1987 p. 7)

(22) 明治二十四年五月発表。(『明治文学全集』44所収、『落合直文・上田万年・芳賀矢一・藤岡作太郎集』筑摩書房 p. 19)

(23) 前掲書 p. 5

(24) 岩波文庫版による (1958 p. 1 ~)。